

# 羊飼のイメージと牧会の 本質理解について<sup>1</sup>

松 見 俊

昨年は半年チェコのプラハに在外研究の機会が与えられましたので、プラハでの研究を発表することを期待されているのかも知れませんが、その研究成果については「西南学院大学神学論集」第68巻にまとめておきましたのでご覧いただくことにして、今日は、この神学部における私の守備範囲である「牧会学」に関するお話をすることにしました。

## 1. 「牧会」の定義と問題の所在

今、私が用いている「牧会」という言葉は、英語の Pastoral care, ドイツ語圏の伝統では、Seelsorge (魂の配慮) を意味しております。ローマ・カトリック教会では「司牧」という翻訳語が充てられているようです。ワープロの、私は「ワード」のソフトを使っていますが、基本設定の語彙では「ぼっかい」で漢字変換ができませんので、一般の人たちには馴染みのない言葉であるかと思います。もっとも、『広辞苑』では、牧会とは、「プロテスタント教会で、牧師が信者の魂の配慮をし、信仰と生活を導くこと」と説明されています。また、関連用語として「牧会書簡」を参照するように指示しています。「牧会書簡」という命名が本当に良いのかどうかは問題があるとは思いますが、Pastoral Epistles には2つの「テモテへの手紙」と「テトスへ

---

1 これは2011年4月4日の神学部開講講演で行った講演に多少手を加えたものである。なるべく臨場感を残すために「です・ます」調のままにしている。

の手紙」があり、それらは、「聖職者の信徒指導について説く」ものであると『広辞苑』は説明しています。

以上の定義あるいは説明は結構、的を射ているとは思いますが、幾つかの問題があります。特に、バプテストの立場から幾つかの問題が見えてきます。その問題をご一緒に考えてみるのが、今日の講演の目的です。問題というのは、3つあるだろうと思います。1つは、「牧師」があるいは「聖職者」が信徒を指導するという一方通行的枠組みの問題です。2つ目は「魂」の配慮ということを通して、「魂」の配慮という教会活動の焦点と、そこから人間の生活全体に広がる大きな領域との関係を問う問題です。ヘブライ語聖書と新約聖書においては、人は、魂と身体とを切り離すことができない「全体」として神との関係に生きているわけです。確かに、聖書の証言において、また、教会活動において、魂の優位性ということはあるのですが、「魂」の配慮だけでよいのか、もし、人間がトータルにケアされるべきであるとしたら、教会の働きはどこまで広がるのかという問題です。そして、3つ目は「信者」の魂の配慮と言って、牧会的配慮の範囲を信者に限定することの良さともまたその狭さの問題です。未信者あるいは非信者に関わらなくてよいのかという問いです。また、この定義における「信者」には教会を専ら行う「牧師」自身は含まれているのでしょうか。牧師は誰に教会されるのかという課題もあるでしょう。以上の3つのテーマを心に留めながら話を進めてみましょう。

## 2. 「羊飼」のイメージと教会

私たちバプテストは、教会の指導者を「牧師」(Pastor)と呼ぶのが普通です。ときどき、「教役者」(Minister)と呼ぶこともありますが、「牧師」と呼称するのが通例でしょう。なぜ、ときに、「教役者」と呼ぶかと言いますと、牧師だけでなく、宣教師、教育主事、音楽主事など教会の働きの担い手が多様で、豊かでありますので、教会の職務の担い手を「牧師」という用語で括れない場合があるからです。ある時、バプテスト連盟主催の「全国教役者研

「修会」が開かれたのですが、この看板を見て、「教える」などとはおこがましい、「教」をいう文字を削除してしまおうということで、「教」という字の上に手を載せて塞いでしまうと、「全国役者研修会」となりました。う～ん、「役者」か、この方がピッタリだなあ、などと笑ったことがありました。それはともかくとして、私たちは「牧師」という言葉を使いますが、実は新約聖書には「牧師」という名称はほとんど登場しません。エフェソ4：11に教会に立てられた教会の役職の担い手として、「牧者・教師」が1回だけ登場します。また、イエス・キリストに対して「永遠の契約の血による、羊たちの大いなる牧者」（ヘブル13：20）と呼んでおり、1ペトロ2：25では、キリストが「魂の牧者」とであると表現されています。

教会の職制（ministry, order）は通常、新約聖書では、「監督」、「長老」そして執事（奉仕者）と呼ばれています。新約聖書には、「牧師」に当たる呼び名が1回しか用いられていないのです。

とはいえ、ヘブライ語聖書と新約聖書には、指導者を示すために羊飼のメタファ（隠喩）あるいはイメージが豊富に用いられています。ヘブライ語聖書では、さらに、神あるいはメシアが「羊飼」のイメージで語られています。エゼキエル書34章には、当時の政治的指導者に対する預言者の辛辣な批判を見出すことができます。「人の子よ、イスラエルの牧者たちに対して預言し、牧者である彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは。牧者は群れを養うべきではないか。お前たちは乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくで、苛酷に群れを支配した。」（1～4節）教会学の有名な古典であるマルティン・ブーツァーの『まことの教会』はこのエゼキエル書を土台にして、牧師の仕事を、改宗していないものを回心さ

---

2 M. Butzer (1491-1511), J. T. McNeil, A History of The Cure of Souls, Harper & Row, 1951. 吉田信夫訳『キリスト教会の歴史』（日本基督教団出版局）1987年、202頁に引用されている。

せること、尋ねてくるものにアドヴァイスを与えること、信仰者たちを建て上げること、教区の家族たちを飼うこと、病気のもの、死にゆくものを訪問すること、懺悔しないものを叱責すること、そして、訓練することの7つにまとめています。牧師の仕事に関する寄り道をしてしまいましたが、政治的指導者を羊飼として言い表すこのような伝統は、モーセが羊を飼っていた経験の中からイスラエルの解放者として選び立てられたこと（出3：1）、ダビデも元来は羊飼であったこととも関連しているのでしょうか。そして、エゼキエル34章は先ほどの引用文のあとで、「まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする」（11節）と主なる神の言葉を付け加え、さらに、「わたしは彼らのために一人の牧者を起こし、彼らを牧させる。それは、わが僕ダビデである。彼は彼らを養い、その牧者となる」（23節）というメシア預言が付加されています。有名な詩篇23篇の「主は羊飼、わたしには何も欠けることがない」という歌も印象深いものです。こうして、待望されたメシアが、「羊飼＝王」のイメージで描かれているわけです。

話を新約聖書に移しましょう。マタイ9：36で、主イエスは、「また群集が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」（参照マルコ6：34）と語られ、福音書は群衆を飼い主のいない羊たちと形容しています。「羊飼」という用語は用いられていませんが「99匹を残して1匹の羊を追い求める者の譬」は印象に残るものです（マタイ18：12～14、ルカ15：1～7）。また、イエスの受難と弟子たちの離反はヘブライ語聖書の引用によって、「わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散ってしまう」（マタイ26：31、ゼカリヤ13：7、マルコ14：27）という出来事として描かれています。つまり、イエスがイスラエルの民の羊飼としてイメージされているわけです。イエスが「良い羊飼」であるというタイトルはヨハネ10章で明確に告白されています。（2，11，12，14，16）。また、十字架につけられ、よみがえらされた主イエスがペトロに「わたしの羊を飼いなさい」（ヨハネ21：15，16，17）と三度語りかけておられる箇所も私たちにとっては極めて印象深いものです。こうして、牧会とは、人を神との関

係において理解する聖書の伝統に根ざして、福音の光の下で、一人ひとりの人間の価値を尊重して、追い求め、キリストのいのちに生きるものへと獲得し、そのいのちを交わり（基本的には「教会」）の中で、豊かに育てていくことを意味しています。ナチスの迫害を経験したE.フロムは『悪について』<sup>3</sup>において、「人間は羊であるのか、あるいは、狼であるのか」という問いでその論述を初めています。人を羊や狼のイメージで語ることの良し、悪しは別にして、人は、生の諸状況の中で、神と隣人から疎外され、分断され、迷いやすく、破れている存在であるということは一つの現実であり、私たちには羊飼がおられるということは喜びです。（私はこの講演原稿を3月14日、あの東北地方太平洋大地震の数日後に書いています。）以上のように、ヘブライ語聖書、新約聖書において神あるいはメシアとその民との関係が、そして民衆の指導者と民、牧師と信仰者たちとの関係が、羊飼—羊のメタファで描かれていることは明確です。

### 3. 羊飼—羊イメージの問題点

羊飼—羊のイメージは相互の信頼関係におけるいのちの通い合いという意味で心温まるメッセージを響かせます。しかし、神と人、リーダーとその民についてのこの羊飼—羊のイメージに問題がないわけではありません。もともと羊飼と羊モデルは政治的なメタファであるので、それが教会活動に適用されるときに、「支配—被支配」、「牧会する者—牧会される者」という構図が生まれてしまうという弱点があるのです。そこで、私たちの教会活動において、イエス・キリストご自身が「羊の大牧者」であり、「魂の牧者」であることは、いつでも念頭に置くべき重要な視点です。そして、牧師がみ言葉の宣教を専ら委ねられており、み言葉が人間的活動に対して「他者性」「主権」を持つ以上、ある種の縦の関係、「距離感」を維持することは重要ではあります。けれども、このイメージが牧師と教会員との関係に用いられる

---

3 E. Fromm, *The Heart of Man: Its Genius for Good and Evil*, 1964. 鈴木重吉訳, 紀伊国屋書店, 1965年。

ときに、牧師は「牧会する人」、信徒たちは「牧会される人」と一方通行的に考えられる危険が付きまといまいます。このような一方的な方向性は、牧師への仕事の集中による「燃え尽き」という問題だけではなく、意識化されないかたちでのセクハラ、パワハラの温床にもなりうるのです。ジョン・リーダーは、今日、一対一の個人的ケアそのものも問われており、個人的なケアよりも集団的な「出会いの場」(location for encounter)を造り出すことを勧めながら、従来の牧会が「依存の文化の助長と他者に対する力とコントロールの行使の危険」<sup>4</sup>を持っていると指摘しています。確かに「守秘義務」ということがあり、教会の権威、権能を「み言葉」を委託されている牧師に集中することに意味はあります。しかし、一対一の対話によって、牧師がその人の人生に関心をもっていることを示すことができ、その人との良い関係を築くために効果的であるということそのものが問題を含んでいるというのです。また、それを牧師が一人で担うことの困難さも自覚されるべきでしょう。そのような気付きから、バプテストは信徒による相互牧会という働きを推進しているのですが、むしろ、それが果たして旨く機能しているかどうかは問題でしょう。「教会学校」プログラムに、聖書の共同学習、アウトリーチ、そして相互牧会と、何もかも詰め込んで、わけがわからなくなっている状態ではないでしょうか？

羊飼—羊のメタファは第二に、群れ全体を守るという口実で「面倒な一人」を切り捨てる正当化のために用いられる危険も孕んでいます。良い羊飼は羊一匹一匹の「名を呼んで」連れ出す(ヨハネ10:3)とあり、羊はその羊飼の声を「知っている」(ヨハネ10:4)と言われてはいますが、このような「良い羊飼」のメタファは、現実に「悪い羊飼」が多いということでもあるのではないのでしょうか？ 確かに群れの中に、我が儘でどう仕様もないと感じられる人がいないわけではないのですが、「群れ全体の枠組みを守るために」一人を切り捨てるということも起こるのです。戦時中に日本の教会指導者が天皇制軍国主義に抵抗できなかったときも、「教会という群れ

---

4 J. Reader, *Reconstructing Practical Theology. The Impact of Globalization*, Burlington/Ashgate, 2008, 47-48.

を守る」という論理が「ホーリネス教会」を切り捨て、日本的キリスト教に走った姿勢の中に支配的であったように思います。

#### 4. 「牧会」の定義①「魂の配慮」(Seelsorge)

それでは、話を、牧会を「魂の配慮」(Seelsorge)と表現するドイツ語圏の教会の牧会活動に移しましょう。ドイツ語圏の教会は、Pastoral care というより、Seelsorge=魂のケアあるいは配慮という表現を使って牧会の働きを言い表します。群全体というより、教会員、個々人の魂を配慮するというイメージです。むろん、「魂の配慮」という言葉に問題がないわけではありません。クリスチャン・メラーによれば<sup>5</sup>、「魂の配慮」はプラトンの『ソクラテスの弁明』に遡ると言います。ソクラテスはアテネ市民に向かってこのように問いかけます。「最上の方！ 最も大きな都、知恵と力の故に知られる都から来られたアテネ人であるからといって、何よりも金銭を得たいと願うが故に金銭のことが気になり、また名誉、栄光が気になるからといって恥ずかしがることはありません。だがしかし、洞察する知恵を得ること、そして、あなたの魂がいつも最上の状態であるように、こころを配ること(エピメイスタイ・テース・プシュケース)はないのですか。そのことを一度も考えたことはありませんか」。このように問いかけて、ソクラテスは、自分自身を知ること、自分の魂のためにこころを用いることを求め、まさに彼自身、「魂への配慮の専門家」(テクニコス・ペリ・プシュケース・テラパイアス)となったのでした。ゼールゾルゲとは、人間がこの世界の肉体的事物に留まったままではなく、不死の世界に旅する強さを得るように準備することでした。

しかし、このような人間の魂に内在する不死性への気づきではなく、キリスト教信仰はむしろ、人間を神との関係において理解します。主イエスは、「自分の魂(プシュケー)のことで思い悩むな」(マタイ6:25)と言われたと伝えられています。また、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自

---

5 C. Moeller (ed.), *Geschichte der Seelsorge*. Goettingen/Vandenhoeck & Ruprecht, 1994.  
加藤常昭訳『魂への配慮』第1巻, 日本基督教団出版局, 2000年。

分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分のいのち（プシュケー）を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命（プシュケー）を失う者は、それを救うのである」（マルコ 8：34～35）とされています。魂の「自己」配慮・自己責任という思い煩いを離れ、むしろ、神に委ね、福音のために生きることが勧められているのです。キリスト教信仰は自分の魂の内部をいたずらに覗きこむことをしません。そこで、トゥルナイゼンは、牧会の目的を、神の恵みに基づいて罪の赦しを宣言し、その赦しが人間の中で救いの出来事となるように支援することであるとします。そして、「牧会が教会にとって必要なのは、神の言を、個人に伝達するためである」と言い、本来、礼拝において宣教される神の言は、「さまざまな形態で」つまり、対話において個人に伝達されることも求めていると言います。ボンヘッフアーの場合は、牧会はずっと特殊であり、キリスト教信仰や牧師や信徒に躓いて、礼拝での宣教を聴けなくなっている個人にみ言葉を伝えるという点を強調しているように思います。ともかく、彼らの牧会の在り方は、人間の魂の配慮の根幹である「罪の赦し」の宣言が中心であり、キリスト教における牧会活動の独自性、特殊性が良く言い表され、心理学の知見が発達し、カウンセリングが流行する世俗化社会において、教会と牧師の働きのアイデンティティを明確にすることが目指されていると言ってよいでしょう。

最近、レイ・アンダーソン<sup>6</sup>が、牧会をはじめ実践神学を「パラクレシス」（傍らに呼び出されており、慰め、訓戒し、勇気づけること）の概念で論じていることは、羊飼—羊イメージを克服する一つの試みであると言ってよいかも知れません。「パラクレトス」とはヨハネによる福音書で聖霊を指して用いられていることは皆さんご存じでしょう。パラクレシスは「カウンセリング」を意味する言葉でもありまして、牧会する人—牧会される人という一方通行的関係ではなく、さまに、「傍らにいるもの」であり、人に成長や変化をもたらすのは、それを担う人ではなく、肉となった言であり、また、聖霊であると強調しています。「パラクレトス」は「カウンセラー」とも翻訳できますが、また、「弁護者＝アドボケーター」とも翻訳さ

6 R. Anderson, *Christian Who counsel*. Grand Rapids/Zondervan, 1990.

れ、アンダーソンは「道徳的弁護」(Moral Advocacy)としての教会について論じておりますので、教会活動とその文脈である、キリスト教倫理あるいは道徳との関係に注目する必要があるということについて後ほど少し触れたいと思います。

## 5. 教会の定義② 教会カウンセリング

さて、「魂の配慮」としての教会というドイツ語圏の教会とその神学と違って、あるいはカール・バルトの神学を受け継ぐ方向性とは少し違って、英語圏では教会学の展開は異なっているようです。世俗化・世俗主義社会に直面してキリスト教会のその実践のアイデンティティを確立するというより、教会とその実践が世俗化・世俗主義社会においていかにレリヴァンス＝適合性を持つかに強調点があるようです。基本的に嬰兒洗礼による教会形成、政教一致の欧州の伝統と現実に対して、自由競争が基本であり、キリスト教会の市民サービスの質が問われる現実においては、教会の目的は、広く、また、人間学的・哲学的に定義される傾向にあります。教会のゴールは、個々の人間が、その罪が赦されるだけでなく、「全きもの」(the person becoming whole, holistic)<sup>7</sup>になることであると定義されているのです。個々人は、神との関係においてだけでなく、人々との交わりの中で回復され、全的なものとなるからです。むろん、聖書においては「魂」はそもそも関係概念ではありますが、「魂」の配慮は、魂と体である人間性全体への配慮であるはずだとされています。そして、教会員への対応だけではなく、その地区の住民へのサービスとして展開されていきます。このようなホーリスティックな人間理解は、魂と体を切り離さない、ユダヤ・キリスト教的伝統に適合する理解であり、神学的には肯定すべき主張でしょう。

しかし、心理学とカウンセリングの手法の発展に伴い、教会とは別に、住民のニーズに応えるために地域に教会カウンセリングセンターが建設され、カウンセリングが教会と牧師の働きから切り離され、世俗的な心理学と心理

7 M. Seitz, Praxis des Glaubens. Goettingen/Vandenhoeck & Ruprecht, 1978, 73-79.

療法が導入されると、なぜ、そのような活動がわざわざ「牧会」カウンセリングと呼ばれるのか、なぜ、キリスト教カウンセリングなのかが曖昧になってくるのは必然でしょう。ここでは逆にキリスト教信仰のアイデンティティが問われることになります。

## 6. 牧会と道德との関連

さらに、世俗化・世俗主義が進行する英語圏において、キリスト信仰がプライベートな領域に閉じこもらずに、「公的な」性格が強調されるようになると、アリストテレスの倫理的な主張が採用されて、牧会の目的は、ゴードン・リンチによれば、キリスト教の価値・倫理感と関係しながらも「善き生活」(good life)を推進することであると定義されます<sup>8</sup>。非キリスト者と事柄を共有するために、善き生活の基準をアリストテレスの倫理学に求めることは神学的に行きすぎであるとしても、傷ついた人をサポートする教会活動が、その人を傷つけている社会構造の悪やその社会が自明的に要求する「正常」の基準がよって立つ「道德法」を問うことは大切でしょう。この世界はどこか資本主義的企業の倫理や人を疎外する強者のルールが支配しているからです。先ほど引用しましたアンダーソンは、牧会を「生活が不可能でなくとも困難に陥ったとき、破壊的ではないとしても関係性が歪められてしまったとき、悲劇的なものが共通認識に矛盾し、信仰さえ危うくなる危機のとき」、そしてこのような時には渦中にある人にとって「神の意志が何であるかが本質的に曖昧である」ゆえに、人の生を肯定する神の道德的意志、つまり、「神は善いお方である！」ことを指し示す「道德的弁護」が必要であると主張しています。心や身体を病む人々は、「道德法を破ったという罪責感を持つ人、あるいは、道德法によって命令された構造の存在を通して人格性の喪失を味わっている」のであり、牧会は、そのような人々に神の道德意志を悟ることができるように、(1) 神の恵みの拡張 (extension), (2) 靈力の譲渡 (transfer, empowering), (3) 癒しの共同体の創造の3つの支援ミニ

8 G. Lynch, Pastoral Care and Counseling, 2002, vii.

ストーリーの形態を提供するわけです。ここではあえて「道徳法」と呼ばれていますが、キリスト教の用語では「律法」と神の意志との関係、そして、律法主義の問題、さらに、福音と律法の関係理解が問題とされているのです。

## 7. 神の恵みの介入と道徳的弁護

レイ・アンダーソンによれば、神は人間存在と契約関係に入り、契約のパートナーとして神ご自身、自然を超えて、かつ、自然に反して、つまり、恵みとして、人間たちと連携されます。このような、被造世界のプロセスへの神の介入 (intervention) なしでは人間の人格性は存在・完成することはないのです。このような文脈では、罪とはこの契約関係からの脱落 (defection) を含む、道徳的、霊的問題です。罪とは律法違反、何か悪を行うということ以上に、神のこの恵みの介入への挑戦的態度 (defiance) のことであり、それは、神の恵みのいのちから人間の人格の分離を結果するのです。そして、そのような罪の結果は、この世における生の道徳的、霊的方向性喪失 (disorientation) であり、神と人と自分自身からの疎遠 (estrangement) と疎外 (alienation) の状況として人間を苦しめることになります。もし罪人がこの道徳的、霊的方向性の喪失の諸結果に放置されるなら、人間の人格性は病氣と生の騒乱のゆえに消え失せてしまうことでしょう。

それゆえ、神の恵みの介入、そして、牧会的対話における道徳的弁護としての介入は、一方的な赦しであり、人間と神との積極的な関係の更新です。ここで重要なことは、赦しの内容が回復された関係のことがらであって、単に、ある道徳法の除外の授与 (the granting of an exception to a moral law) ではないことです。道徳法は赦しの可能性を持っていません。しかし、赦しはこの道徳法と同じ源泉である神の意図、道徳的善 (moral good) に根ざしているのです。こうして、恵みの拡張による赦しは、究極的な道徳的善であり、道徳法を超越してはいますが、それを破壊することはないのです。それゆえ、教会は何が正しく、善であるかを決定することにおいて道徳法の基準を認識し、介入を通して道徳的弁護を提供することによって道徳的善を維持せねば

ならないのです。牧会はまた、人が罪の結果を通して悪の中にい続けるときには、道徳的弁護を提供し、神の恵みの拡張としての赦しのための道徳的基盤を提供せねばならないのです。恵みとはまさに、その人と罪の結果との間を切り分ける神の道徳的介入に他なりません。このような神の恵みは人間の側の悔い改めや回復なしで、まさに恵みとして無償で宣言されねばなりません。赦しは、あるいは神の恵みは、信仰と悔い改めを生み出す道徳的善の根源であると言ってよいでしょう。

## 8. 力づけてあげること (empowerment) としての牧会

次に、霊的力の譲渡としての弁護についてのアンダーソンの主張に耳を傾けてみましょう。ここで譲渡 (transfer) とは、ケアを提供する人が生来的に所有しているものを、ケアを受ける人に譲渡することを意味してはいません。それは弁護者そのものである聖霊の働きから来るのであり、道徳的弁護としての牧会は力を失った人を強める (empower) ために奉仕することなのです。イエスによる病いの癒しは、その人から信仰の力を引き出すのであって、悪霊からの解放はそれ自体が目的ではなく、その人を人とこの世を支配する悪に対して道徳的、霊的確かさによって立ち向かうことができるように強めることが目的なのです。そのような Empowerment はその人の傍らに居ること、そして、悪の力が痕跡としてその人に刻印している痛みと葛藤を分かち合うことによってなされます。「苦しんでいる人に神の力と善とに接触をもたらすのは神の苦しみなのである」。むろん、Empowerment という考え方の中に依然として近代自由主義的な Power へのこだわりがあるのではないかという批判は大切でしょう。しかし、そのような批判がありうることを認めた上で、牧会の働きが、道徳的弁護によって人を単に癒すだけでなく、解放し、新たにされて生きる力を与える働きであることについて、さらに、Don S. Browning から学んでみましょう。

## 9. 教会のコンテクストとしてのユダヤ教的、預言者的、パリサイ的道德合理性？

Don S. Browning<sup>9</sup> は教会活動の道徳的文脈として、アリストテレスの倫理学やその他欧米文化のヒューマニズム的な世界観や人間観ではなく、古代ユダヤ教の預言者的、パリサイ的道德的合理性 (the tradition of practical moral rationality typical of ancient Judaism) というコンテクストに置くべきであると主張しています。たとえば、結婚カウンセリングにおいては、夫婦の感情の処理やコミュニケーションの仕方などの心理学的知識だけではなく、「結婚とはキリスト教信仰において何を意味するのか」という、われわれがケアに持ち込む「意味の枠組み」を明確にするキリスト教倫理学の確立が重要であるというのです。ブラウニングが「パリサイ的」ということを語っていることに驚かれる方々もあることでしょう。キリスト者にとって、パリサイ主義は主イエスの論敵として登場し、ほとんど否定的にしか評価されていないからです。しかし、ウェーバーは彼の宗教社会学の『世界宗教の経済倫理』において、古代ユダヤ教の預言者の精神が「世俗内禁欲」の精神としてパリサイ派によって引き継がれ、その律法主義が主イエスに批判されましたが、それがカルヴァン主義信仰に受け継がれているとみなしています。弱肉強食の資本主義はキリスト教の福音による経済活動の徹底的批判と合理的倫理性なしには内部崩壊するであろうことを見ていたわけです。

このような、マックス・ウェーバーの宗教社会学の知見に刺激されて、ブラウニングは、預言者、パリサイ主義、そしてカルヴィンのこの世における神の主権の倫理学に至る「世俗内禁欲」を今日のキリスト教の教会活動の道徳的コンテクストにすることによってキリスト教信仰のアイデンティティを確立しながら、教会活動にある種の普遍性を与えようと試みているわけです。

現代社会における価値観のめまぐるしい変化と多様化は、それらに対応する人の内面の成熟を超えて行き、心の病の根幹の問題となっており、キリス

---

9 D. S. Browning, *The Moral Context of Pastoral Care*, Philadelphia/The Westminster Press, 1976.

ト教的生き方もまたどこか曖昧になって、牧会がますますただ対処療法的になり、種々の心理学の前提となっている哲学的、道徳的世界観・人間観を神学的に吟味することなく、感情的慰め、癒しのみが前面に出てきていないかと問いかけています。そして、牧会における個人的ゴールと社会が要請する道徳的ゴールとの間に食い違いがあると、心や体を病んでいる人が教会とその牧会において元気をもらって、周辺・環境社会に出ていくというより、ずっと教会に留まるという、モラトリウム状態になると警告しています。

## 10. 過渡期の一時性の意味と問題点

私たちは、人生の節目、節目において、ある住み慣れた文化・社会から新しい文化・社会に参加していくのですが、その移行の中間に、一時的な移行期があります。開講講演を聞いておられる新生はまさにそんな移行期にあるでしょう。ヴィクター・ターナーは「ほとんどの原始的社会ではリミニリティは移行的で一時的であり、常にその集団の構造的な生活への再編に導かれるが、より複雑な都会的社会ではリミニリティは徐々に宗教の中心的ゴールとなった」といいます。つまり、儀式的な一時的治療プロセスである、自由で、古い世界でも、新しい世界でもない未分化の状態がそれ自身で目的そのものとなるということです。確かに、教会自身が救いの共同体として目的自体であるという面と、「他者のための教会」と言われるように世界に出て行く、神の国の成就の一つの「手段」でもあるという二面があるわけです。しかし、この二面性の緊張が崩れると、ひとは、奉仕の煩わしさから解放された居心地の良さを楽しむ「万年求道者」となったり、バプテスマは受け取れど、教会という新しい社会にうまく編入できなくなったり、心や身体の癒しを求めてキリスト者となったけれど、教会にはおれても、世界に旅立つことができず、増加してくるわけです。むしろ、緊急避難的に社会での役割からの「是認された退去」(the sanctioned retreat) というものが許されてよいでしょう。大きなハンデキャップを抱えている人、一生涯生活保護を受け続けることを必要とする人がいても許されるでしょう。しかし、本来、一時的・

過渡的であったものが恒常化してくると、人は少しずつでも変わることができるというテーマと、誰がいったいその人たちを支えるのかという問題が深刻化してきます。プロウニングの道徳哲学は自由主義的、進歩主義的であり、その中に差別を内包する危険がありますが、カルヴィニズムの持つ、信仰の応答責任性、世俗内的禁欲のモラルが失われていけば、そこでなされる教会、あるいは本来の教会の放棄は、ボンヘッファーの言う「安撫な恵み」となり、教会や社会そのものが成立しなくなる危険もあることでしょう。傷ついた感情を受容することは大切ですが、一時的に道徳的判断を停止あるいは延期することと判断することそのものを拒絶することとは大きな違いでしょう。「受容あるいは赦しの概念は、もし道徳的秩序と判断が欠如あるいは混乱させられている場合には全く意味をなさない。」という言葉には耳を傾ける価値があるでしょう。それゆえ、牧師は価値の多様化と曖昧化に耐えることのできるような心理学的知見を学ぶと共に、神学するものとして、キリスト教倫理そのものが複雑化する中でその相対性、曖昧さを認めつつも置かれた文脈に応答するキリスト教信仰から生まれる倫理・道徳・価値を具体的に提示していく責任を負わされているのです。

少し難しい話になったかもしれませんが。そこで最後に、教会の実践者の言葉に耳を傾けたいと思います。北九州ホームレス支援機構「ニュースレター」2010年残暑厳しい秋号の奥田知志先生の言葉です。テレビ放映後にどこからか批判が寄せられたのでしょうか。彼の人との関わりについての考えが深められています。「(NHK)『プロフェッショナル』の中で「ひとはいつか変わる」という、これまでホームレス支援において大切にしてきたテーマが紹介されました。「人を変える」のではなく、「人はいつか変わる」。そのことを信じて歩んできました。それは野宿状態の方々のみならず人間にとっての希望であると思っています。しかし、実はこの「人はいつか変わる」と並んで、もう一つ大切にしてきたテーマがあります。…それは「人は変わらなくても生きる」です。「変わる」だけならば、…「変わらないなら本人が悪い」ということになりがちです。また、「変わった人は良い人だ」とも。しかし何よりも大切なのは、その人がたとえ変わらなくても「今日会えた」

「今日生きた」ということをまず喜ぶことなのです。「変わる」は、その上での希望です。」

現代の牧会者は、ひとりの悩める人との出会いにおいて、この「変わらなくても受け入れられている」という神の恵みによる赦しの宣言と、その赦しをどう生きるかという重たいテーマ、「人はいつか変わる」という希望に根ざしながら、「この住みにくい世界で、どのように人と共に生きるか身を伸ばす」という課題を指し示すというせめぎ合いの中に悩み続けるのでしょう。